



Title	「宗教」に対するエリアーデの不安 : エリアーデによる天空神論の分析を通して
Author(s)	奥山, 史亮
Citation	基督教学, 42, 33-36
Issue Date	2007-06-28
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46709">http://hdl.handle.net/2115/46709</a>
Type	article
File Information	42_33-36.pdf



[Instructions for use](#)

# 「宗教」に対するエリアーデの不安

— エリアーデによる

天空神論の分析を通して —

奥山 史 亮

宗教学を他の宗教研究から分かつ、その固有性とは一体何なのであろうか。私はこの問いに対して、「宗教」という概念について語り得ることを前提とする学問と答えたい。この場合の「宗教」とは、教団や宗派、信仰者と呼ばれる複数の実体的対象を抱合する意味を持つ。特定の社会的諸対象を「宗教」という概念によって包括することを可能にする理論的基盤、またそれらの諸対象において共通する要因を判知する概念的基盤を究明すること。これが、一般に宗教学と呼ばれる学問が研精する諸辺であると私は考える。この点において宗教学は、他の学問による宗教研究とは区別される。一般の宗教研究は、

個々の教団や宗派の研究を行うことはあっても、「宗教」概念そのものを究明することはないためである。

しかし近年のアカデミズムでは、その「宗教」概念自体の学問的有用性が問題視されるようになってきている。すなわち宗教学とは、宗教現象と他の文化的営みとの峻別を可能とさせる宗教性という要因を自明視しており、その「宗教」に対する自らの信仰的確信を対象化できていないという批判である。これらの批判者たちは、「宗教」がヨーロッパにおける特殊な政治的推進力を背景として構築された概念であることを分析することにより、そのイデオロギー性や西欧中心主義を明らかにした。以上のような宗教概念再考論において、二十世紀最大の宗教学者と称されたM・エリアーデ(Mircea Eliade)は、格好の批判対象とされた。北米のR・マツカチオン(R・McCutcheon)やR・コルレス(R・Cortess)に代表される批判的研究によれば、エリアーデは近代西欧で成立した「宗教」概念や「聖」概念を普遍的に適用可能な概括用語として使用することにより、その概念に付随するイデオロギーの拡張を行ったと評価されている。本発表で

は、以上のような批判が妥当であるのか否か、エリアーデ宗教学の再解釈を行なうことで検討してみたい。具体的には、天空神に関するエリアーデの研究についての再解釈を試みる。

マツカチオンによれば、普遍的で実在的、自律的な価値を付与された「宗教」を措定して展開されるエリアーデの宗教研究は、「宗教」を政治や歴史から切り離すことでそれに特権的な地位を与える。さらに「宗教」を特権化することは、その研究に携わる「宗教学者」の立場をも特権化することに同義である。エリアーデによる非還元主義的な研究姿勢は、エリアーデ派の研究者へと継承された。これらエリアーデ派の研究者たちは、エリアーデの宗教学が如何なる歴史的、政治的過程を経て構築されてきたのかという問題を考慮しない内在理解型のエリアーデ研究を行なった。その結果、エリアーデがルーマニア時代に大天使ミカエル団などの「ファシズム運動」と接触をもった事実を軽視するに至ったのである。ポスト・エリアーデ時代の研究者は、「宗教」や「宗教学」

を政治的推進力から切り離すことで特権化してその言説の敷衍に寄与するのではなく、「宗教」を還元不可能な現象だと論じる言説が如何に権力や政治的不均衡を作り出すのかという問題について批判的に対峙していかなければならないとマツカチオンは結論する。

しかしエリアーデは、宗教学者として活躍し始めた最初期から、「聖」は常に歴史の中に出現すると主張しており、歴史的、文化的地平への視座を疎かにすることはなかった。そのことは、天空神が暇な神 (*deus otiosus*) へと変容することに関する考察に端的に示されている。一九五七年に出版された『聖と俗』の第三章「自然の神聖と宇宙的宗教」は、天空のヒエロファニーについての分析から始められている。エリアーデによれば、天空はその構造からして最も「聖」を喚起させやすい存在である。それは宗教的人間に対して無限なもの、超越的なものとして啓示される。そのため多くの歴史上における天空神は、至高神であったのだという。

しかしエリアーデは、天空神の超越性について分析した後、それが暇な神へと変容する過程について言及して

いる。エリアーデによれば、多くの地域において太古に大きな力を持っていた天空神は、次第に人間の世界から離れていき、終には人間にとつてほとんど影響力を持たない存在へと変容するのである。この天空神が暇な神へと変容する原因について、エリアーデは以下のように考察している。

「神の遠離」は実際には、人間自身の宗教的、文化的、経済的発見に対する関心の高まりを表現する。原始人が生の聖体示現に関心を持ち、豊饒な大地の神聖性を発見し、そして「より具体的な」（より肉体的な、さらにはより熱狂的な）宗教体験に動かされるようになる、彼らは超越的な天空神から遠ざかる（*Das Heilige und das Profane*, Insel Verlag, 1998, s. 111.）。

この引用から、天空神の暇な神への変容の原因は、人間の日常的な生の営み、個々人のより具体的生活への関心にあるとエリアーデが考えていたことを確認すること

ができる。人間は日常的な生活と直接の関係を持たない超越的、抽象的な「聖」への信仰を持続することは出来ない。そのため日常生活においては、天のヒエロファニーは次第に忘却されていくのである。再び超越的な天のヒエロファニーが人々によって想起されるのは、日常生活が破壊された非常事態においてである。

以上の天空神についての考察から、人間の一般的関心は超越的、抽象的な「聖」ではなく、具体性を持った出来事や日常の生活へと向かうものであることをエリアーデは十分に認識していたことが確認できる。このような日常性へのエリアーデの視座は、人間の文化や歴史は、「聖」への参与を志向する視点から全てを解釈することは不可能であり、「聖」から乖離する傾向をも視野に入れば把握できないことを意味していると考えられる。従がつてエリアーデが、絶対的な「聖」への参与のみを重視して宗教研究に従事したと理解することは即断であると思われる。

多くの論者により指摘されるように、エリアーデに

は、普遍的な「宗教」や「聖」を先験的に定立して、その概念に組み込める事例をかき集めていく体系建設型の側面があったことは否定できない。しかし確認したように、エリアーデ宗教学には概括用語が提示するイデオロギーの枠に収まろうとしない歴史的、文化的現実の多様性、固有性に対する視座も存在した。そしてそのような体系と多様性の間における葛藤は、天空神の考察だけに止まらず、エリアーデ宗教学の基調である形態学と宗教史の統合の試みへと接続されていると私は考える。それが如何に接続されるのかという具体的考察については、本発表では割愛せざるを得ない。しかし、体系化とは逆のベクトルを持つ現実に対するエリアーデの視座に注目してその学問的営為の再解釈を行なうことは、新たなエリアーデ像を提示することを可能にすると私は考える。